

聖書：マタイ 21：12～22

説教題：葉があるだけで

日時：2020年2月16日（朝拝）

先週の箇所で、イエス様は神から遣わされたまことの王として、ゼカリヤ書の預言通り、ろばの子に乗ってエルサレムへ入城されました。そのイエス様はまずどこへ行かれたのでしょうか。それはエルサレムの宮、神殿でした。イスラエル人の宗教生活の中心地。人々がどんな信仰に生きているか、端的に現れている場所です。そこでイエス様は驚くべき行動を取られます。12節にありますように、イエス様は宮に入ると「その中で売り買いしている者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒されました。これまで見たこともないようなイエス様の激しいお姿です。一体何が問題だったのでしょうか。売り買いする人たちや両替人たちがいたことが問題だったのでしょうか。申命記 14 章 24～26 節を見ると、エルサレムの宮に巡礼する人は遠い地方からいけにえを自分で準備して持って来るのは大変なので、エルサレムまでやって来て、そこでお金と交換して良いと規定されていました。また神殿税を払うために両替も必要になります。ですからこれらのことのために働く人たちがいることは問題ではありません。では何がいけなかったのか。それは 13 節のイエス様の言葉から分かります。イエス様はそこで『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに・・・」と言っておられます。つまりここが「祈りの家」になっていないことをイエス様は問題にされたわけです。これはイザヤ書 56 章 7 節からの引用ですが、もともとの箇所を見ると、この宮は外国人にとっても、彼らが主に祈り、主と豊かに交わる家となると言われていました。イエス様がいた当時、いけにえが売買され、両替が行われていたのは「異邦人の庭」と呼ばれる領域でした。外国人たちはこの「異邦人の庭」から先は内側に入って行けません。ここは彼らが宮の中で礼拝できる雄一の場所です。そんな場所で売り買いがなされ、両替所はごった返してお金がジャラジャラ言っている状況では、異邦人たちの礼拝が妨害されています。これではイザヤ書が言うような「すべての民の祈りの家」という状態になっていない。そのことにイエス様が怒りを発せられたということなのかもしれません。

しかしおそらくイエス様の関心はより大きなものだったと思います。異邦人の庭だけではなく、全体としてここが祈りの家になっていないということです。先に見たように、いけにえの売買や両替は必要です。しかしそちらがメインになっていて、祈りがおろそかにされていた。真の礼拝が端っこに追いやられていた。人々が全国から沢山集まり、

にぎやかで、多くのお金が行き来して、ヘロデによる大規模神殿補修もなされ、これぞ神の祝福のしるしだ！と思われる豊かさが満ちていました。しかし肝心な神への祈りが無い。神への飢え渴きが無い。神との真の交わりが無い。その状態を見て、イエス様はエルサレムに入城した真の王として嘆かれ、怒られたのでしょう。

またイエス様は「それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている」と言われました。「強盗の巣」と聞くと、ここにいた人たちが金儲けに明け暮れていたように思うかもしれませんが、多くの学者たちは必ずしもそうだったわけではないと述べています。この言葉はエレミヤ書7章11節をもとにした言葉ですが、そこを参照するとこの言葉がどういう意味で使われていたかが分かります。エレミヤ書7章9～11節：「あなたがたは盗み、人を殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに犠牲を供え、あなたがたの知らなかったほかの神々に従っている。そして、わたしの名がつけられているこの宮の、わたしの前にやって来て立ち、『私たちは救われている』と言うが、それは、これらすべての忌み嫌うべきことをするためか。わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目に強盗の巣と見えたのか。見よ、このわたしもそう見ていた——主のことば——。」ここから分かることは、当時の人々は普段、神が喜ばない生活を送っていながら、この宮に来て儀式を行っては「私たちは救われている！」と偽りの安心感を抱いていたということです。自分たちはこのエルサレムの宮を持ち、ここでこのようにいけにえをささげているから大丈夫！と言って、また普段の生活に戻って盗み、人殺し、姦淫、偽りの誓い、偶像礼拝の罪などを平気で行っていた。そんな彼らが集まる宮を神が見ると、強盗の巣に見えるというのです。強盗のような悪事を働いても、ここへ来て決められた儀式を守れば赦されると言って、都合の良い逃げ場になっている。その結果、この神聖な宮が強盗たちの巣窟になっている、そのように見えるというのです。

果たして私たちはどうでしょう。もちろん私たちはこの礼拝に来ることは大事です。しかしこの場所に来ていつも私は礼拝を守っているからそれで良いということにはならない。ここから出たら、また罪深い生活へ帰って行って、日曜日になるとここで礼拝をささげて、私は救われていると安心する。しかしそこに本当の意味での神への祈りは無いし、生きたつながりもない。そんな私たちを見て、神が同じく強盗どもの巣窟と見られることはないでしょうか。自分の姿を振り返って良く吟味する必要のある主の言葉であると思います。

さてイエス様はそんな中、みもとに来た目の見えない人たちや足の不自由な人たちを癒やされました。このような人々は異邦人の庭までは来ても良いが、それ以上は進んではならないと制限されていました。その彼らをイエス様は癒やされました。こうしてイエス様はここでも神の国の祝福をもたらしておられました。しかしこの様子を見て面白くないと思う人たちもいました。宮を管理する祭司長や律法学者たちです。彼らはこの宮で自分たちが承認した商売人たちをイエス様が追い出したことも面白くありませんし、こうして不思議なわざを行っていることも面白くない。そしてさらに腹が立ったのは子どもたちによる賛美です。きっと子どもたちはイエス様による癒やしやの奇跡を見て驚き、前回の 21 章 9 節に記されたエルサレム入城の時の群衆の賛美を覚えていて、それをまねするかのようにして、イエス様に向かって「ダビデの子にホサナ」と声を上げていたのでしょう。これが祭司長たちにとっては我慢ならない。早くやめさせたい。そこで彼らはイエス様のところに来て、「子どもたちが何と言っているか、聞いていますか」と詰め寄ります。しかしイエス様は詩篇 8 篇 2 節を引用してこう答えられました。「聞いています。『幼子たち、乳飲み子たちの口を通して、あなたは誉れを打ち立てられました』とあるのを、あなたがたは読んだことがないのですか」と。ここにもこの世の価値観と天の御国の価値観の大逆転という真理が示されています。イエス様は前にも 11 章 25～26 節でこう言われました。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。」 イエス様に向かって「ダビデの子にホサナ」と叫んだ幼子たちには分からないことは沢山あったと思います。しかし彼らはイエス様のみわざの内に素晴らしい神の恵みの世界が到来していることを見て取りました。そしてそれにふさわしい、自分たちが知っている最高の言葉で賛美しました。その彼らは確かに真理に近いところにいます。一方、祭司長や律法学者たちは色々学んで来た人たちであるのに、メシヤを前にしても、神の国がここに到来していることが分からない。むしろこれに文句をつけ、そこから遠ざかろうとしている。改めて神の救いにあずかる方法は人間の知恵によらないということを教えられます。私たちはへりくだらなければなりません。自らの知恵と力を誇り、心を頑なににして、神の国から遠ざかる者とならないように。むしろ幼子のような心で神に導いていただく者でなければならないと教えられます。

さて今日は 18 節以降の記事も合わせて読むことにしました。その方が両方の記事により理解しやすくなると思ったからです。ここに書いてあることも衝撃的です。イエス

様が空腹を覚えて、道端にあるいちじくの木に近付くと、葉があるだけで他に何もありませんでした。そこでイエス様はその木に「今後いつまでも、おまえの実はないように」と呪いの言葉をかけます。するとたちまち、いちじくの木は枯れたというのです。一体これはどういう話なのか、とここだけを読むと誤ってしまいがちです。イエス様は決して空腹が満たされなかったという単純な理由で怒ったわけではありません。イエス様は荒野で 40 日間、悪魔の誘惑を受けた時、非常な空腹を覚える中で、石をパンに変えてみよとけしかけられても、その誘いに乗らなかったお方です。あのお方が食べ物が入らなかつたからと言って、即、怒りを爆発させる方であるはずがありません。確かに食べ物があるかと思って近づいて、それがなかつたと知ってがっかりしたのは本当ですが、イエス様はこのことを通して大切なことを教えようとされたのです。それは何でしょう。それは葉があるだけで実がないものは、このようにされるということです。そして特にイエス様がここで考えていたのは、今見たばかりのエルサレムの状態ではないでしょうか。普通いちじくは葉があれば実もあるようです。ですから葉があれば茂っていれば、当然そこには実もあるだろうと期待される。ところが行って見ると実が何もありません。それはまさにこの時のエルサレムそのものです。外見的には華やかで、人々がたくさん集まり、にぎやかで、葉っぱは沢山茂っているが、肝心の実が一つもない。見せかけだけの木。そういう木はやがて必ず滅ぼされる。そのことをイエス様は教えようとされたのです。

弟子たちはこの出来事に接して「どうしてこうなったのでしょうか」と尋ねます。これに対するイエス様の言葉は、今日の箇所を読む私たちに大きな希望とチャレンジを与えてくれる御言葉だと思います。イエス様は「まことに、あなたがたに言います」と言われて、これから話すことは大切であることに注意を向けさせています。そして言われたことはこういうことでした。今、いちじくの木に大変なことが起こった。しかしもしあなたがたが信じて祈るなら、あなたがたにもそういうことができる！ということです。今見たイエス様のみわざは、ある意味で破壊的なみわざでしたが、イエス様が言うことは、このような神の驚くべき力が良い意味で働く場合のことです。イエス様は続けて、「この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言えば、そのとおりになります」とも言われました。前にも似たようなことをイエス様は話されました。17 章 20 節：「もし、からし種ほどの信仰があるなら、この山に『ここからあそこに移れ』と言えば移ります。」これは私たちの頭で考えられないようなこと、とても信じられないようなことが起きるといった意味の言葉です。最後の 22 節でも「あなたがたは、信じて祈り求め

るものは何でも受けることになります」と約束されています。もちろんこれは自分勝手な祈りが何でも聞かれるという約束ではありません。「信じて祈る」のですから、それは神を信じる信仰から出る祈りでなければなりません。また神を信じる祈りですから、神の御心に沿った祈りでなければなりません。そのようにして神を正しく見上げ、神に信頼して祈る生活をするなら、私たちの想像をはるかに超える神の力に生かされる者となる。「何でも」と言われているように制限はありません。その神に祈りを通してつながり、神の力によって生きる者であるように！とイエス様は招いてくださったのです。

私たちは今日の箇所を読んで、このエルサレムの姿は他人事でないと思うかもしれませんが。そのように思うことは正しいことだと思います。私もそれなりの信仰生活を送っているつもりではいるが、イエス様を見るとそこに肝心なものが欠けている。礼拝に来て救われている！と思っているが、普段は神が望まない生活を続けていて、イエス様が眺めるとここも強盗の巣であるかもしれない。葉は色々茂らせて立派に見えるが、イエス様が望まれる実はない。私たちはどうやってここから抜け出すことができるでしょうか。そのための道としてイエス様が示しておられるのが祈りではないでしょうか。神を見上げて信じて祈るなら、私たちは今自分が考えている思いをはるかに超える神の力と導きに生きる者とさせていただける。この私も神の救いの民の内に入れられて、神の素晴らしい恵みによって生きる人生へ変えられることができる。また既に救いを頂いたはずの私も、もう一度新しくいのちを注がれて、実を豊かに結ぶ者とされる。また神の力によって神が喜ぶ生活をささげ、神に栄光を帰す様々な働きをささげる者へと変えていただける。逆にこの祈る生活へ進まなければ、私たちは「葉があるだけで」という生活、そしてやがては滅ぼされる生活へと至ってしまいます。イエス様がいちじくの木に近付いて、そこに実があるかどうかを調べようとされたように、イエス様はやがて私たち一人一人のところにも必ず来られます。そこにどんな実がついているかを調べに来られます。イエス様は私たちの内に何を見出されるでしょうか。私たちは今日の御言葉に導かれて改めて神に祈る生活へ進みたいと思います。こんな私でも祈りを通して、神の力により、神に喜ばれる実を豊かに結ぶ生活へ、またそのように私を導いてくださる神にすべての栄光を帰し、この神を私の喜びとする神の民の幸いな歩みへ進んでまいりたいと思います。